

屋久島と種子島の観光化の現状

桑原季雄

Present Situation of Tourism in Yakushima and Tanegashima Islands

KUWAHARA Sueo

鹿児島大学法文学部
Faculty of Law, Economics and Humanities, Kagoshima University

要旨

鹿児島県の大隅諸島を構成する屋久島と種子島の観光の実態はどうなっているのだろうか。世界自然遺産の屋久島の観光情報のみがマスコミや様々な情報誌に取り上げられたりして情報であふれているが、もう一方の種子島の観光についてはあまり知られていない。

大隅諸島の観光の大きな特徴は、沖縄や伊豆諸島のいくつかの島々と違って、1960年代以降の観光の大きな特徴である真の意味でのマストゥリズムを経験していないということであろう。マストゥリズムは、これまで新たな産業として、各地で観光開発が推進されが、1980年代後半になると、オルターナティブ・トゥリズムとしてグリーン・トゥリズムやエコトゥリズム等の概念が提示され、新たな観光開発の戦略が提起されるようになった。

本稿では、大隅諸島の種子島と屋久島の観光に焦点を当て、鹿児島県島嶼の観光全体に位置づけて比較考察し、その特徴や今後の展望について述べてみたい。

屋久島の観光化の現状

鹿児島市の南方 135km、県本土の南方約 60kmの海上にあり、周囲 132km、面積約 500 平方キロメートル、人口は 1970 年に約 1 万 7 千人であったのが 1990 年から現在まで約 1 万 3 千人 (2014 年 8 月現在：屋久島町役場) を維持している。鹿児島、大阪、福岡を結ぶ航空便の他に、2 隻のフェリーと 5 隻のジェットフォイルが毎日運航していて、交通の利便性は極めて高い。

屋久島の入込客数は1984年から1988年まで11～12万人台で推移したが、1989年、高速船トッピーの就航により、17万人台に急増した。1993年12月に屋久島が世界自然遺産に登録されたことにより、翌1994年から入込客数が増加し、1995年から2002年までの間は25万から28万人台で推移し、2003年に初めて30万人台を突破した。新たに高速船ロケットが参入し競争が始まる2004年以降、30万人台の前半で推移し、2007年には過去最高の40万人台を突破した。その後は、現在まで、30万人台で推移している。さらに、2009年には入込客数が種子島の入込客数を初めて上回り、現在まで屋久島の方が種子島を上回る傾向が続いている。種子島は2011年に30万人を割ったのに対し、屋久島は30万人台を維持している。

以上のように、屋久島の入込客数は1980年代前半までは最高でも10万にあまりで推移していた。ところが、1990年を境に急激な増加がみられ、2007年度には40万人台に達した。入込客には、屋久島の住民の利用や出張等の仕事による来島者も含まれているが、全体の65～70%は観光客と推定されることから、30万人近くの観光客が屋久島を訪れていることになる。とくに最近では、高速船の増便などで交通アクセスがよくなり、関東からのパックスツアー企画の増加などの影響が大きく、エコツアーガイドや宿泊施設数もそれと比例して多くなってきている。

種子島の観光化の現状

種子島は鹿児島市から南に約115km、県本土の南に約40kmに位置し、面積約444平方キロメートル、周囲186kmで、奄美大島、屋久島に次いで3番目に大きく、国内では10番目に大きい。標高は最高地点で282mしかなく、1,936mの屋久島と比べると対照的である。人口は約3万3千人（2014年現在）で、奄美大島に次いで2番目に多い。

種子島の入込客数は、1984年～1989年までは20万人台で推移し、1990年に30万人台に達した。特に1989年のトッピー就航の効果により、船での入込客数が航空機の2倍弱に急増し、1991年には船での入込客数が20万人を超え、翌1992年には28万8千人とピークに達した。一方、航空機での入込客は1986年から1993年まで10万人台で大きな変化はない。従って、入込客数の大幅な増加分は高速船トッピーの就航による効果であると言える。

1990年～2004年までは入込客数は30万人～33万人台で推移し、2007年には現在までで最高の45万人の入込客数があった。この年の観光客数も15万人と過去最高の数字になっている。その背景には、2004年12月に高速船に新たにロケットが参入したことにより、トッピーとロケットの2社間で価格競争が起こり、運賃が安くなったことが挙げられる。しかし、2008年から減少に転じ、2009年からは前年までの40万人から30万人と、一気に10万人ほどの減少があり、2011年以降は30万人を割った。2012年の統計は27万9千人で、観光客の推計は9万4千人となっている。

船の利用者は1985年の約11万人から1990年から2000年は20～24万人で推移し、2005年に36万人台と急増し、2010年に26万人台と減少してきた。最も少ないのが1986年の約10万人、最も多いのが2007年の約41万人である。

一方、航空機は、1985年に9万6千人だったのが、2000年に7万2千人、2010年には4万人弱と大幅に減少した。この間、最も少ないのが2011年の3万5千人で、最も多かったのが1991年の11万人だった。船の利用者の増加と航空機の利用客の減少は高速船（トッピーとロケット）の就航による影響が大きいと思われる。

種子島と屋久島の観光化の比較

種子島と屋久島の観光はあらゆる面で極めて対照的である。両者の間には「自然」対「文化」の二項対立的関係が随所に見られる。一方、いわゆるアニメ聖地巡礼あるいは「コンテンツ・ツーリズム」と呼ばれる観光形態では数少ない共通点がある。

隣り合う二つの島であるが、1) 観光資源の視点からみると、屋久島は自然（ヤクスギ、奥岳の山々）であり、種子島のそれは文化（ロケット基地、宇宙センター、鉄砲、鍛冶など）である。2) アニメ聖地巡礼の観点から見れば、屋久島は宮崎駿のアニメ「もののけ姫」の舞台であり、苔むした森や精霊、自然がテーマであるのに対し、種子島はアニメ「ロボティクス・ノーツ」や「キャプテン・アース」などの人工的なロボット、サイエンス＝文化がテーマと言える。また、3) 博物館も、屋久島は屋久杉館が自然と文化をテーマにしているのに対し、種子島は鉄砲館や宇宙センターの展示館など、科学と文化がテーマになっている。さらに、4) 観光客が求めるのも、屋久島はヤクスギの森やウミガメといった自然であるのに対し、種子島はサーフィンや鉄砲、ロケットなどの文化であり、時代的には屋久島が縄文時代といった過去に対し、種子島は宇宙開発という未来が対置される。電力の面でも屋久島の水力＝自然に対して、種子島は火力＝文化である。

むすび

屋久島は世界自然遺産とエコツーリズムの島としてその名声が定着している一方、種子島は鉄砲伝来やロケット基地の島として知られ、両者はあらゆる面で対照的な島である。しかし、いわゆるアニメ聖地巡礼あるいは「コンテンツ・ツーリズム」と呼ばれる観光形態では数少ない共通点がある。

これまで、鹿児島県の島嶼地域の観光化は、種子・屋久、三島、十島、奄美群島といったブロックごとに展開されてきたが、今後は各ブロックがもっと緊密に連携し、相互の交流を通して様々な情報を共有し協力関係を構築していくことによって、鹿児島県の島々が全体としての観光化を考えていくことが重要だと思われる。

参考文献

柴崎茂光・坂田裕輔・永田 信 2003. 屋久島における年間観光客数と観光需要特製の推計—離島における精度の高い推計方法—. 東京大学農学部演習林報告, 110 : 1-25.

屋久島町企画調整課 2013. 平成 24 年度版統計やくしま, 43 頁, 屋久島町企画調整課, 鹿児島.

西之表市ホームページ <http://www.city.nishinoomote.kagoshima.jp/>

屋久島町情報統計 http://www.yakushima-town.jp/?page_id=308

ロボティクスノーツ聖地巡礼 IN 種子島

<http://www.m-riron.sakura.ne.jp/ibento/seitijyunrei/h25/robonojyunreianime.html>